

# 学科科目「学習心理学」の周辺

— 1968年～2014年 —

小美野 喬\*

心理学の科目「学習心理学」および、比較心理学と行動分析学を通して、学科創立から現在に至るまでの45年について、関連する状況を概観した。その結果、学習心理学とその関連領域の内容は、担当教員の専門性により特化されてきたこと、その効果は学生と担当教員の双方に表れていること、および、効果は心理学専門研究施設の整備と担当科目専任教員の研究成果に支えられていることが示された。また、学習心理学とその関連領域は、このような成果に基づいて、新たな展開を図るべき時期を迎えつつあることが示唆された。

## 0. 序

2014年は、明星大学の理工系学部創立から数えて50周年記念の年である。わが心理学科(創立時は心理教育学科)は、理工系学部から2年遅れではあったが、人文学部の1学科として産声を上げ、以来、大学の歴史とほぼ並行して発展し、今日に至っている。

本稿は、本学科のほぼ50年にわたる歩みを顧みながら、筆者が本学学部学生の時期を経てから教員として過ごしてきた時期(1974助手に就任, 2015年教授で定年退職)と重ね合わせ、学科科目である学習心理学やその関連科目について、これらの講義内容が形成されていく過程とこれに伴う動物行動実験にまつわるさまざまな出来事を思いつくままに記した。それゆえ、本稿は、厳密な検証や考証を経ていない雑記帳的「メモランダム、覚書」、あるいは私史である。したがって、後述する内容の一部は、いずれ正確な資料や詳細な検証に基づき編纂される正史により修正されるかもしれない。

なお、本稿で記した方々の詳細な研究業績については、インターネット上で収集が可能なため、非礼と思いつつ、割愛させていただいた。

## 1. 授業科目「学習心理学」の骨格形成過程

その大学がどのような教育や研究の目標を持つか、言い換えれば、大学あるいは学科の特徴は、学部や大学院のカリキュラム(授業科目や授業運営)において顕著に示される。

わが心理学科のカリキュラムは、設立当初から一貫して基礎心理学を基幹とする心理学の習得を目的として編成されてきた。基礎心理学系科目、たとえば心理学概論、社会心理学、および実験心理学(知覚心理学、学

習心理学、心理学研究法)などの科目群がこれに相当する。本稿で取り上げる学習心理学は、比較心理学とも深く関連させながら、「動物行動の教育と研究」に関わる授業科目として位置づけられた。

### 1-1. 岡野先生の比較心理学と学習心理学

学習心理学の講義およびそれに関連する演習は、学科の発足当初より岡野恒也助教授(のち、静岡大学, 日本女子大学, および愛知みずほ大学学長)が担当した。先生は、日本における霊長類研究の草分け的存在であり、従って、講義内容は、野外観察から実験的研究における研究成果に基づくオランウータンやチンパンジー、あるいはニホンザルの社会行動や言語行動からネズミの弁別学習に至るまで広範囲に及んだ。先生のこうした教育および研究内容は、やがて、わが心理学科における学習心理学の方向性を決定づけることとなり、その影響は現在にまで及んでいる。

### 1-2. 菅野先生の学習心理学と行動分析学

学習心理学は、岡野先生の退任を機に、菅野衷専任講師(のち、教授)によって引き継がれた(1972-1984および1994-2005)。菅野先生は、学習性行動の実験的研究ばかりでなく、理論的分析や数理的分析を専門領域としていた。したがって講義内容は、動物行動の数理心理学的分析から言語や思考の理論的分析にまで及んだ。先生が学習心理学の担当を引き継いだ1980年代は、東京学芸大学、筑波大学、および慶応義塾大学を中心とした日本における行動分析学研究の始動期と重なった。行動分析学の守備範囲は、動物を被験体(主にネズミ、デシショバト, サル)とした学習性行動の実験的分析(実験的行動分析)から、その成果に基づく諸原理(主にオペラント行動の諸原理)のヒトへの応用(応用行動分析)、さらにそれらの理論的行動分析にまで及ぶ。先生は、行動分析

学に強い関心を寄せるとともに深く研究を進め、その成果を精力的に授業に取り入れた。したがって、わが心理学科における学習心理学は、先生によって、さらに行動分析学的色彩を強く反映させる内容として変容するに至った。

菅野先生の学習心理学に対する行動分析学的な視点は、臨床心理学とも関係が深い応用行動分析学の関連科目開設に大きく影響して今日に及んでいる。ちなみに、現在、竹内康二准教授(2007から現在)が担当している応用行動分析学の関連科目群は、出口光専任講師(1985-1988, めききの会会長; コンマの左は明星大学での在職期間, 右は現職, 以下, 同様)を出発点として、それ以降、山本淳一専任講師(1988-1998, 慶応義塾大学教授), 野呂文行専任講師(1998-2001, 筑波大学教授), および大石幸二専任講師(2001-2007, 立教大学教授)へと進展し、今日に引き継がれている。

### 1-3. 小川先生の行動生物学とオペラント心理学

1980年台の初頭、慶応義塾大学から明星大学に転任された小川隆教授(1981-1993)は、これまで10数年にわたり、わが心理学科において形成されてきた動物行動関連科目の特徴をさらに明確なものとした。先生は、行動分析学の創始者であるハーバード大学のスキナー教授よりハト用オペラント実験措置を贈呈された(1950年初頭)のを機に、慶応義塾大学において本邦初となるハトによる弁別学習の実験的行動分析を開始し、その後、日本の行動分析学を支える多くの研究者を育成した。先生は、学習心理学ばかりでなく知覚心理学の分野においても多くの研究成果をあげてこれ、さらには、さまざまな動物の示す学習性行動及び知覚行動について、ハトの採餌行動やヒヨコの刻印づけ行動の研究を通して行動生物学との関わりを重視してこれられた。わが心理学科の学習心理学と比較心理学に関連する科目群は、先生が構築されてきた行動生物学とオペラント心理学によって更に補強され、現在のように整備・統合されるに至った。

比較心理学は、学習心理学の担当者交替による専門領域の継続と進展の歴史を経たのち、専門科目として開講(1981)され、小川先生は本学科における最初の科目担当者となった。

### 1-4. 私の場合 一源流の踏襲一

私が明星大学心理教育学科に入学(1968)した当時、2, 3年次に岡野先生の学習心理学関連科目を受講することができた。先生は、その頃、学位請求論文の制作に取り掛かっており、その主要テーマであるチンパンジーの言語習得実験、さらには、伊豆・波勝におけ

るニホンザルの社会的行動に関する研究成果について授業を通して逐次紹介され、多くの学生を魅了した。私は、先生の演習科目において、教科書「学習」(メドニック, S.A. 著, 八木晃訳, 岩波書店)に記載された「潜在学習」の内容を緊張しながら発表したことを覚えている。

菅野先生が助手であったころ、先生は学生有志の要望にこたえ、行動分析学、数理心理学、および心理学研究法について、週に2回ほど自主講座を開講されていた。私は、幸いにもこの講座に参加することが許され、これらに関する基礎的知識ばかりでなく最新の知識も得たことで、心理学への興味・関心は増幅した。

当時、明星大学には大学院が設置(修士課程は1974, 博士課程は1978にそれぞれ開設)されていなかった。そのため私は、菅野先生の勧めもあり、先生の母校である慶応義塾大学の大学院に進学し、ここで実験的行動分析による動物実験(ハト)のスタートを切った。その頃、小川先生は慶応義塾大学心理学科の主任教授であったが、そこで先生の門下生として指導を受けることになった。私は、院生時代を含み、先生が同大学退任後、明星大学に心理学科教授として就任され、やがて同大学退職に至るまでの期間、合算すると実に20数年にわたり先生の指導を受けることができた。

私は、1972年、心理学科の助手として採用され、やがて専任講師(1983), 助教授(1986), 教授(1990)となり、その間、菅野先生および小川先生と共に学科運営に参加することができ、両先生の退職に伴い、わが心理学科が培ってきた学習心理学の源流を引き継ぐこととなった。したがって、私の担当科目は、私自身の昇任・昇格や担当者の退任、カリキュラムの一部改編にともない、比較心理学(1994-2005)や学習心理学(1985-1993, 2006-2014)となった。岡野先生に端を発し菅野先生と小川先生により整備されてきた学習心理学の流れをひとつの系譜とすれば、これを踏襲することに誇らしさと喜びを実感した。それと同時に、この本流を維持すること、言い換えれば専門領域とその関連領域を高水準に維持し続けるには、相当の努力が必要であることも痛感した。

この間、研究助手および非常勤講師と専任教員との協力指導体制も徐々に形成されてきた。研究助手の仕事の中には、自身の研究遂行のほかに、学部学生の卒業論文や大学院生の修士論文および博士論文の製作過程において、実験装置の開発や実験動物の長期的な維持管理などに関わる問題への対処・助言などがある。私が助手の当時、米国を中心にパーソナル・コンピュータ(PC)が心理学実験に使用され始めた。わが心理学科

もこれに倣い、学生ばかりでなく教員の研究促進のためにも PC の導入が急がれた。PC の導入に伴い、プログラミングの開発や入出力装置の製作はもとより、論理演算方式から弱電に関する基礎理論に至るまで、心理学以外のさまざまな知識が必要であった。真辺一近助手（現職、日本大学教授）は、PC および入出力装置の開発に積極的に取り組み、これにより、授業や研究の促進化に寄与した。この間、学内の教員、特に横倉三郎先生（現在、人文学部教授）と緒方正幸先生（現在、理工学部准教授）には、測定装置や実験装置の開発に多大な援助と助力をいただいた。

心理学科は、長年の間、実験学科としてその特徴を鮮明にするために、学部学生全員に動物実験の体験教育を実施しようという希望があった。2011 年に至り、動物実験施設の充実に伴い、学科必修科目「心理学実験」において、2 年次の心理学科全学生がハトを被検体とする学習性行動実験を体験できることとなった。現在、日本において心理学系学部・学科において動物実験が体験できる教育機関は少ないという現状からすると、わが心理学科は貴重な存在であるといえることができる。

## 2. 教育・研究施設充実への道のり

ヒトを含む動物行動の解明を目的とする学習心理学、比較心理学あるいは行動分析学の研究は、自然観察による場合と環境統制が可能な実験室的観察による場合とに二分される。また、被験動物は、研究目的に合わせて、それにふさわしい動物種が決められる。すばらしい動物行動研究が立案されても、その研究が直ちに実行できるものではなく、研究実施に必要な施設や設備の充実が伴わなければ一歩も進まない。わが心理学科は、上述した 3 科目の研究領域から要請される実践的研究場面の構築に向け、さまざまな努力を重ねてきた。

### 2-1. 黎明期：「サル小屋」

学科発足当時、心理学研究室や実験室は、現在「クラブ・ハウス」となっている場所にあり、かつて「6 号館」と呼ばれた建物の 1 階にあった。実験室は、主に心理学実験科目の授業運営にあてられ、専らヒトの行動を研究対象とする施設・設備となっていた。したがって、動物を用いた野外研究や実験的研究に適した環境の整備が要望されることとなった。これに応じて、1970 年台の初頭、「6 号館」の西側に「サル小屋」と呼ばれる平屋の独立棟が建設された。「サル小屋」は、通常の天候には左右されない程度の質素な環境整備しかなされていなかったが、サル研究グループの学生たち

により研究会や研究用具の保管などに利用されることとなった。「サル小屋」では、ニホンザル（共同研究用にお茶の水女子大より借与され、その後 1974 年 10 月、同大に返還された）、ラットやニワトリが飼育され、弁別学習の研究も試みられるようになった。これと並行して、「6 号館」内の一部実験室においても、ラットの一般活動性や迷路弁別実験も開始された。顧みると、今から 40 年以上前のこの時期が、明星大学における動物行動研究の黎明期であった。

### 2-2. 揺籃期：仮住まいとしての実験室

岡野先生の転任に伴い、「サル小屋」を中心に営まれてきた野外における行動観察を研究手法とした教育・研究活動も中断せざるを得なくなった。この後を引き継いだ菅野先生と私は、共にデンショバトを被験体とする実験室的研究を志向していたため、心理学実験の授業実施に支障をきたさないよう十分に配慮して、6 号館実験室の一部である工作室や暗室を動物実験室として臨時に使用することにした。ハトを主とする動物実験は、この時期にこの場所において本格的に出発したのであり、当時の「ああ、実験ができる!」という感激は忘れ難い思い出である。しかしながら、このような仮住まい状態の場所で動物実験を長期的に行う場合、動物の飼育管理に伴うヒトへの影響と合わせ、動物自身の健康管理もまた重要な課題であった。難問山積ではあったが、とにかく、ハトによる逆転弁別学習や選択行動の実験が開始された。また、キングギョ、グッピー、アリなどによる弁別学習、強化スケジュール、採餌行動などの研究も行われるようになった。

### 2-3. 確立期：初代「行動分析研究棟」(17 号館)

1980 年 7 月、「サル小屋」にとって代わり、その地に 17 号館「行動分析研究棟」が新設された。同棟の構造自体は簡便なものではあったが、2 階建ての独立棟であり、1 階に 1 実験室、トイレ、倉庫、準備室、および飼育室を備え、2 階に 4 実験室を持つことができた。同棟では、ただちに PC による実験の自動化が行われ、当時、日本国内でも有数の設備を持つ施設として評価されるに至った。この時期は、学習心理学、比較心理学、および行動分析学（実験、応用、および理論を含む）に関連した専任教員の在籍人数が最も多かった（4 名）こともあり、教員と大学院生との共同研究も飛躍的に活性化していった。

本格的な動物実験施設の充実に伴い、学部学生たちの間に動物行動に関する関心・興味が増大し、学内施設では実施不可能な課題も出てくるほどであった。たとえばゴリラのドラミング行動、チンパンジーのコ

コミュニケーション行動、ニホンザルの嗅内皮質活動と記憶などがそれにあたる。これらの実験実施に関しては、東京都立多摩動物公園、京都大学霊長類研究所、あるいは東京都神経科学総合研究所などより研究受入れの承認が得られ、比較的長期にわたる研究により貴重な成果をあげることができた。なお、2000年ごろ、東京都神経科学総合研究所でご指導いただいた靱負正雄博士により、獣医師である小長谷勝利博士をご紹介いただいた。小長谷博士は、特にハトに関して日本有数の病理研究者であり、爾来、今日に至るまで、ハトの飼育管理や治療について様々な指導・援助を受けている。

#### 2-4. 発展期：新「行動分析研究棟」(17号館)

2007年、これまで使用してきた研究棟の老朽化、学内環境の再整備、あるいは動物実験に関わる諸規定の遵守といった問題への対応として、新「行動分析研究棟」の設置が検討された。新棟設計の根本思想は、文部科学省による「動物の愛護と管理」と「実験動物の適正と飼養」に関わる諸法規の遵守に適合するところにあった。早速、学内において「明星大学動物実験に関する規定」および「明星大学動物実験委員会細則」が制定された(2008年1月)。2009年、新「行動分析研究棟」が、大学敷地内の南西部に新設された。ここに至るまで、大学内の関連部署ならびに大学外の関連施設の方々から多くの支援をいただいた。学内においては特に徳永修一氏(総務課、課長)、学外においては渡辺茂氏(慶應義塾大学名誉教授)、伊藤正人氏(大阪市立大学名誉教授)、および小野浩一氏(駒澤大学教授)から、多くの貴重な資料を提供していただいた。新「行動分析研究棟」は、さまざまな点で旧「行動分析研究棟」を凌駕する動物実験施設であり、日本国内におけるハトの行動実験施設として有数の規模を持つ研究施設となった。

なお、新研究棟で扱われる動物実験の内容は、学内研究者で構成される「動物実験委員会」が「研究」と「教育」の両面について当年度「報告書」と次年度「計画書」を詳細に検討し、それぞれについて可否が厳密に審査されている。

#### 3. 足跡 —“学習心理学”が育んだもの—

授業科目としての学習心理学、比較心理学、あるいは行動分析学は、基礎分野から応用分野に至るまで、学部学生の卒業論文、あるいは大学院生の修士論文や博士論文の研究テーマに影響を及ぼした。これらは、担当教員の研究遂行と研究成果、およびそれを反映する授業内容によって支えられてきた。

関連分野にもとづくテーマを扱った卒業論文数は、

これまでの40数年間で推計500件に及ぶ。修士論文数は、100件を優に超えている。また、博士論文数は、論文博士と課程博士を合わせて6件がある。これらの業績をあげて巣立っていった600有余人の中には、外国を含む研究機関の研究者や大学教員、幼稚園・小学校・中学校・高等学校の教員、あるいは専門施設の職員となつて、専門知識を生かしている人がいる。ひとつだけ紹介すれば、上原貴夫博士(3期卒業、長野県短期大学教授)は、1980年代後半から現在に至るまで、群馬県を中心とする野生ニホンザルの群行動に関する貴重な研究を続けており、研究成果は複数回の新聞報道によって知られている。

教員の研究活動は、学内の研究費ばかりでなく、研究内容の評価に基づいて支援される学外の研究費補助により維持される。担当教員が研究代表者となつて文部省の科学研究費助成金を得た動物行動関連の研究は、昭和57、58年度一般研究A、昭和59、60年度一般研究A、および昭和62、63年度試験研究A(いずれも研究代表者は小川隆教授)の3件がある。これら研究費補助金により遂行された研究内容は、「選択行動の実験的研究」、「デンショバトにおける選択行動モデルの実験的研究」、および「実験的行動分析における画像処理装置を用いた反応解析法の開発」であり、当時、学内では菅野教授、出口専任講師、山本専任講師、真辺助手、および私が研究協力者として参加した。

この様な研究費の支援を支えられ、担当教員による様々な学会活動も行われてきた。関連学会としては、日本心理学会、日本動物心理学会、日本基礎心理学会、日本行動分析学会であり、定例の大会における口頭発表やパネル発表、あるいは学会機関誌への論文投稿などを行ってきた。担当教員による発表の総数は、正確に数え上げたことはないが、おそらく数百件に及ぶものと思われる。

特定の大学が定例の大会開催を引き受け、学会発表の場を提供することも学会活動の重要な一面である。科目担当教員は、日本動物心理学会第31回大会(1971、大会委員長は岡野恒也教授)、日本行動分析学会第13回大会(1995、大会委員長は菅野衷教授)を主催し、あるいは帝京大学で開催された日本動物心理学会第73回大会(2013、大会委員長は高田孝二帝京大学教授)の支援委員として協力した。

また、担当教員による社会的貢献とでもいうべき活動の一環とし、NHKテレビの子供向け科学番組(信州大学と共同)、朝日新聞によるデンショバトの行動研究に関する取材、あるいは雑誌社によるハト研究施設の

取材などに協力したこともある。

#### 4. 学習心理学の新たな展開に向けて

私見によれば、学習心理学は生活体の行動変容過程（学習性行動）を解明し、比較心理学はその一側面として生活体の行動変容過程について動物種間で比較する。また、行動分析学の研究目的は、「生活体は、何故にそのように行動するのか」という問いについて、解発行動、レスポデント（誘発）行動、およびオペラント（自発）行動といった3側面で機能的に説明しようとするものである。また、行動分析学は、特にオペラント行動の変容過程（学習性行動）を重視する。したがって、学習心理学が関与すべき多くの研究対象は、行動分析学の研究目的に含まれることになる。一方、〇〇心理学として分類される心理学の様々な専門領域は、「生活体の行動変容過程」（学習過程）を当該行動の説明のために取り入れている。

心理学科設立以来、50年あまりを経過した現在、学習心理学は行動理解の根幹を担う科目であるという思いに変わりがないものの、培われてきた伝統的解釈に

新たな知識を加味して、学習心理学の科目名を再検討すべき時期であるかもしれない。本年には、再検討を試みる格好の機会が訪れる。本年の8月末、明星大学主催による日本行動分析学会第33回大会（2015, 大会準備及び実行委員長は竹内康二准教授）の開催が予定されている。当学会はまさしく「行動分析」に関わる学会であるため、発表内容はもとより、講演会やシンポジウムで取り扱う内容についても、行動分析学に関する最新の知識や動向が得られる。さまざまな視点から学習心理学の今後を再検討するに当たり、この機会は新たな知見を提供してくれる。これを好機として、竹内康二准教授（障がい児学、応用行動分析学）と行動分析学にも造詣の深い境敦史教授（知覚心理学）が中心となり、今学会の開催準備委員でもあり私との共同研究者でもある茅野一穂常勤准教授、古野公紀兼任講師、小原健一郎兼任講師らの実験的行動分析学者による協力が得られるならば、これまで学習心理学とその関連科目が作ってきた学科基礎科目の本流は変わっていく。私は、新たな流れの誕生を期待している。

## 小美野 喬教授の業績一覧

### 学歴

- 1968/04～1972/03 明星大学 人文学部 文学士  
 1972/04～1974/03 慶應義塾大学大学院 社会学研究科 文学修士  
 1980/04～1983/03 明星大学大学院 人文学研究科  
 1994/3/24 明星大学 博士 (心理学)

### 職歴

- 1973/09～1974/03 明星大学 人文学部 嘱託助手  
 1974/04～1980/03 明星大学 人文学部 助手  
 1980/04～1983/03 明星大学 人文学部 嘱託助手  
 1983/04～1986/03 明星大学 人文学部 心理・教育学科 (心理学専修) 専任講師  
 1986/04～1990/03 明星大学 人文学部 心理・教育学科 (心理学専修) 助教授  
 1990/04～2010/03 明星大学 人文学部 心理・教育学科 (心理学専修) 教授  
 2010/04～2015/03 明星大学 人文学部 心理学科 教授

### 論文 (1985 年以降, 抜粋)

- 1985 選択行動と強化の遅延時間 (単)  
 1990 自動的反応形成と行動分析 (共)  
 1991 選択行動と強化の遅延時間—初環効果と終環の弁別過程— (単)  
 1993 A qualitative analysis of sensitivity to conditioned reinforcing value of terminal-link stimuli in a concurrent-chains schedule (単)  
 1993 Choice and delay of reinforcement: Effects of terminal-link stimulus and response conditions (共)  
 2001 抵抗膜方式タッチスクリーンによるハトのつつき反応検出システムの実験的行動分析への適用 (共)  
 2002 現代の子どもの「遊び」(1)—現状と影響する要因— (共)  
 2005 Rhythm analysis of music for emotional operation (共)  
 2007 デンショバトにおける移動行動の分析—距離を制御変数とする強化スケジュールの検討— (共)  
 2008 枯渇する餌場におけるデンショバト (*Columba livia*) の採餌行動と限界値定理の適用可能性 (共)  
 2009 連続強化スケジュール, 間欠強化スケジュール, 消去がハトのキーつつき反応の位置次元および距離次元における行動変動性に及ぼす効果 (共)  
 2014 デンショバトの線分刺激による多次元性刺激性制御 (共)

### その他 (著書, 訳書, 教科書; 1980 年以降, 抜粋)

- 1986 心の探求—心理学入門 (共)  
 1989 行動心理ハンドブック (共)  
 1989 心理学基礎実験 (講義ノート) (共)  
 1991 心理学 (共)  
 2003 行動生物学・動物学習辞典 (単, 訳)  
 2008 心理学に興味を持ったあなたへ 大学で学ぶ心理学 (共)  
 2009 心理学ナビゲーションブック 「科学的思考」「バランスの取れた人間観を目指す (共)」

*A simple history of setting learning psychology as a subject to the  
psychology course of Meisei University : 1968~2014*

*TAKASHI OMINO (DEPARTMENT OF PSYCHOLOGY FACULTY OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES MEISEI UNIVERSITY)  
MEISEI UNIVERSITY ANNUAL REPORT ON PSYCHOLOGICAL RESEARCH, 2015, 33, 1-7*